

# 自立活動だより(職員)

秋田県立聴覚支援学校  
自立活動部  
令和6年3月18日発行

## 障害者総合支援法に対応した補聴器購入について

身体障害者手帳をお持ちの方は、障害者総合支援法により補聴器などの補装具の費用が支給される制度を利用できます。(※人工内耳の場合は、音声信号処理装置の修理のみ。)

- ・ 原則1割の自己負担で購入できます。 ※所得によっては例外あり。
- ・ 2級・3級、4級・6級のいずれかに該当した場合、利用できます。  
(重度難聴用) (高度難聴用)

※市区町村によって、補聴器支給までの流れが異なる場合があります。まず、自分が担当している幼児児童生徒がお住まいの役所のホームページで「補装具」について調べてみましょう。

### 【例 秋田市】



秋田市の場合、ネット上で調べるより「障がい者のためのくらしのしおり」の方が分かりやすいです。

←上記(令和5年度版)のリンク先です。

※補装具については、p21に記載。

秋田市役所の場合、申請書と医師の意見書等の必要書類は、障がい福祉課の窓口でもらうことになります。

※役所のホームページ上でダウンロードできるところもあるそうです。

## 自立活動委員会(2/13)の報告について

①令和6年度から、「自立活動的配慮」の文言が変わります。

### 【従来】

#### 「自立活動的配慮」

▲他校では使われない表現であり、外部の人に混乱を与えてしまうのではないか。



### 【今後】

#### 「授業の際の聴覚障害に係る配慮事項

～聴覚障害の特性を踏まえて～

②佐藤淳特別支援アドバイザーから

・自己理解や障害認識、セルフアドボカシーは、教えられるものというより人との関係の中で育つものである。難聴学級の児童を見ていると、小学校中～高学年に自己理解や障害認識に関する本人の気づきが見られる。

例:T・Y(本校の中学部2年生 ※R6.3月時点)

自分の発音や声量に課題がある(課題への気づき) ↔ イラストを描く能力が高い(強み)  
→ゆっくり話す、相手との距離に応じて声量を調整(工夫や改善策を考え、実践)

・聞こえる人との関わりの中で、学びが得られることもある。本校の子どもたちが、多様な視点をもつためには、「交流及び共同学習」の機会を検討する必要があるのではないか。

## 聴覚障害者の情報取得について

特別支援教育専門研修の講義で学んだことから抜粋して情報提供をします。詳細について知りたい方は、加賀谷までお声がけください。

講義「聴覚障害教育の ICT 活用と情報モラル」より 筑波大学附属聴覚特別支援学校 内野 智仁 氏

聴者の授業は視覚と聴覚の使用を前提としており、音声ありの場面は負荷が分散されやすい。一方、聴覚障害者の授業は視覚中心の学習を前提としており、視覚へのオーバーフローが常に生じやすい状況にある。そのため、授業全体で負荷を評価し配慮する必要がある。

視覚情報の提示の仕方にも、強調の仕方、説明文の位置などにより理解のしやすさも変わることが研究から示されている。これらを踏まえて、学習に有効な提示の仕方を工夫する必要がある。



普通の授業はもちろん、オンラインによる交流や学習においても、文を読む時間の確保や提示する情報の取舍選択などの情報の提示の仕方に配慮が必要であると考えさせられました。

研修でよく挙げたキーワードは「インクルーシブ教育」「共同学習」でした。情報保障の技術も進歩し、ますます共に学ぶ機会が増えることと思いますが、情報取得の違いを踏まえて参加体制を整えていく必要があると感じました。

## 小学部の自立活動～あさのつどい～

小学部では、毎朝15分間の合同自立活動「あさのつどい」を行っています。その季節に見られる物や事柄を言葉(文字・手話)と結び付けたり、校外学習などの行事で見聞きする物や動作を表す言葉を学んだり、手話で歌を歌ったりと、様々な内容に取り組んでいます。実態差はありますが、学習の中でどんなことをねらうか、個々の児童のどんな力を育て伸ばしていくかなどを考え、学習活動を設定しています。子どもたちにとって集団の中で学ぶことも多く、友達を意識して伝える力、話している友達を見る力などが育ってきています。友達の姿を見て真似したり、友達や教師に「いいね」「合っています」などと称賛されたりすることで、自信をもって意欲的に取り組む姿が見られるようになってきました。



### 「7-7-7運動会」

息を吹きかけ、棒にぶら下がった紙を進めていきます。口をすぼめたり、強く息を吹いたりすることを意識して取り組みました。



### 「まんたらめ宿泊学習にいこう」

宿泊学習の活動について、言葉や手話を確認したり、楽しい活動を発表したりしました。「私は・ぼくが一番楽しいことは〇〇です。」という文の形で発表しました。理由を加えて発表した子どももいました。